

生涯を通して健康の保持増進を目指す実践力の育成
—ジグソー活動を用いた「がん教育」の授業の在り方の提案—

佐藤 道子

【要約】

本校保健体育科では、豊かなスポーツライフの基礎を培うための授業モデルを追究する中で、3年前から保健分野の授業の在り方を研究してきた。文部科学省や本県において「がん教育」の推進が提唱される中で、今後は第2学年において「がん教育」が取り上げられるため、先行実践として行った。ジグソー活動やクロストークを用いたことで「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善だけでなく、他教科で学習したことや家庭での新たな取組などが見られた。

【キーワード】 主体的・対話的で、深い学びの実現に向けた授業改善 保健体育の実践力
ジグソー活動 クロストーク がん教育 教科横断的

1 主題設定の理由

平成29年7月に新たな学習指導要領が公示されてから2年。中学校では、完全実施までの移行期間に入った。中央教育審議会答申では、改訂に際して①「何ができるようになるか」②「何を学ぶか」③「どのように学ぶか」という点を示した。学校現場では体育分野において、「何ができるようになるか」は視覚的にもはっきりわかるため、生徒の関心は技能向上に向かうことが顕著で、指導の目的もそれに特化することが目立った。また保健分野においては、教科書の重要語句を教えることに重点を置いた教師主導の一斉講義型や知識伝達型が多く見られるのが実態で、生徒が習得した内容を実生活に生かすことができているかは疑問が生じる。

本校の保健体育科では、近年、豊かなスポーツライフの基礎を培うための授業モデルを研究してきた。その中でも保健分野では、生涯を通して健康の保持増進をするためには、学習したことを実生活に取り入れ生かしていく実践力が必要であり、その実践力が高まる授業を構築しなければならないと考え、ロールプレイやジグソー活動を取り入れた授業を実践してきた。公示された中学校学習指導要領にも、「現在だけでなく生涯を通じて健康の保持増進や回復を目指す実践力の基礎を育てる」とあり、本校の研究は「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善が求めている学び方にも合致しているといえる。

以上を踏まえ、生涯を通して健康の保持増進を目指す実践力を育成する一助として、保健分野においてジグソー活動を用いた「がん教育」の授業の在り方を提案することを本研究の目的としようと考えた。

2 研究のねらい

生涯を通して健康の保持増進を目指す実践力を育成するために、ジグソー活動やクロストークを取り入れた「主体的・対話的で、深い学び」を実現する授業改善に取り組み、その実践の効果を明らかにする。

3 研究の仮説

ジグソー活動やクロストークを用いた授業を行うことで、資料から必要な情報を読み取る力やその読み取った情報を他者へ伝える力が養われ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につながり、生涯を通して健康の保持増進を目指すための実践力を育成することができるであろう。

4 検証方法

- (1) ジグソー活動を行った学級と講義形式で行った学級の学習内容の理解度のデータを比較し、ジグソー活動が有効であったかどうかを分析する。
- (2) 学習に使用したワークシートから、実生活につなげている（つなげようとする）記述を抽出し、「見方・考え方」を働かせている内容や、記述の量を明らかにする。
- (3) デイリーライフ（生活の記録）や学習3か月後の感想から、本授業が実生活にどのような影響を与えているかを調査する。

5 研究の内容

(1) 昨年度までの本校保健体育科の取組について

本校保健体育科では、平成 29 年度から「21 世紀型授業」を目指し、生徒自身が本時の課題を設定し、その解決に向けた取組の実行・工夫・改善ができることをねらいとした授業づくりに取り組み、平成 29 年度からは、「実生活に生かせる知識・技能」として、保健分野においても授業改善に力を入れてきた。ここで述べる「21 世紀型授業」とは、梅澤が「体育における『学び合い』の理論と実践」の中で、「『技能を高める』ことに重点を置いて教材や教具の工夫を進める授業構成は、20 世紀型の教育方法である」と指摘しており、そのような授業から脱却する授業モデルを提案すべく、研究を進めてきた。

平成 29 年公示の中学校学習指導要領保健体育科編では、保健分野の「欲求やストレスの対処法」や「応急手当（心肺蘇生法）」の単元において、「対処の方法ができるようにする」と述べられているところから、実生活にすぐに生かせる知識が求められていることがわかる。一斉講義型の保健分野の授業では、一問一答に対応する知識を詰め込むようになってしまう。そこから脱却するための授業改善策として、目に見えないもの（見えにくいもの）を具体物化して可視化することで理解度を高め、学習したことを実生活で生かすためのリハーサルとしてロールプレイを行ったり、ジグソー学習の手法を用いた討論を行ったりすることで、生徒の興味関心を高めるだけでなく、知識を家庭や実社会とリンクさせて考えさせることにつながるのではないかと考えた。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善について

中央教育審議会答申では、「主体的・対話的で深い学び」を 1 時間の授業の中だけで短期的に実現するものではなく、単元や題材のまとまりの中で中・長期的に生み出すものとして捉えることの大切さを指摘している。また田中は、「主体的・対話的で深い学び」を成立させるためには、①学習モデルの活用、②認め合いのある学び、③学習の可視化という、ユニバーサルデザインの 3 つの原理を意識した授業作りが不可欠であると言及している。加えて、10 個の要素別に「深い学び」と「浅い学び」を比較している。さらに、深い学びの鍵となる「見方・考え方」について、澤井は右図 1 のように三つの資質・能力を結びつける歯車で表現しており、各教科の授業で「見方・考え方」を働かせることで、単元全体の活性化につながるとしている。保健分野の学習において、現在まで多く用いられている一斉講義型の授業方法では、「教える・まとめる・写す・理解することが中心」という浅い学びの学習方法が多く、課題解決的な資質・能力の育成が含まれていない。そのため、心の発達やストレスなどの実際に目に見えないもので難しい、性に関することは恥ずかしい、机上での学習よりも体を動かした方が楽しいなど生徒の興味・関心が薄れ、それを自己のキャリア形成につなげていくことの実現は、講義型の授業方法では難しいといえる。



【図 1 見方・考え方のイメージ】

こうしたことから、本校では学習課題の設定や学習形態等に重点をおいて実践してきた。「主体的・対話的で深い学び」を実現させるための単元づくり・授業づくりが日々の中で当たり前実践できるようになれば、生涯を通して健康の保持増進を目指すための実践力を育成することができるのではないかと考えた。

(3) ジグソー活動について

ジグソー法とは、アメリカの心理学者エリオット・アロンソン (Elliot Aronson) が提唱したもので、学習者同士が協力し合い、教え合いながら学習を進めていく方法の一つである。

- ①ホームグループ…均等にいくつかのグループに分け、今回の学習における課題を提示する
- ②エキスパート活動…ホームグループで役割分担を行い、互いに異なる学習をする
- ③ジグソー活動…②で学習内容のインプットを終えたらホームグループに戻り、発表する

本来であれば、上記のような学習の流れで行うが、これを実際に授業の中で行うとなると、2～3 時間を要するため、多くの学校では、保健分野の学習の中ではなかなか取り入れることができない。

そこで本研究では、短時間でも同じような学習形態をとることができるよう、①と②を短くし、特に③のジグソー活動に重点を置いた。①、②の内容は薄くなるが、その分、ジグソー活動前の個人としての時間を大切にし、③のジグソー活動で情報交換の時間を長くすることで、グループやクラス単位でアウトプットするだけでなく、友達からの多様な考えをインプットすることができ、学習効果が上がると考えた。

6 授業実践

(1) 単元名 「健康な生活と疾病の予防 (ウ) 生活習慣病などの予防 (がんの予防)」

(2) 単元について

① 単元観

近年の社会環境や生活環境の急激な変化は、国民の心身の健康にも大きな影響を与えており、ストレスによる心身の不調などのメンタルヘルスに関する課題、アレルギー疾患や感染症など、新たな課題が顕在化していることが「がん教育」の在り方に関する検討会にて報告されている。その中でも、生涯のうち国民の二人に一人がかかると推測される「がん」は重要な課題であり、がんに関する知識は健康に関する国民の基礎的教養として身に付けておくべきものとなりつつある。このような背景から、平成29年7月に告示された学習指導要領では、今まで第3学年で取り扱ってきた「生活習慣の乱れと生活習慣病などとのつながり」や「喫煙、飲酒、薬物乱用と健康」を第2学年で取り上げ、その中で「がんの予防」について学習することを明記した。生活習慣病とがんの発生とを関連付け、がんの発生にはさまざまな要因が重なっていること、がんの予防のためには適切な生活習慣を身に付けること、健康診断・がん検診などで早期に異常を発見することができることを理解させることなどが求められている。

② 生徒の実態

本学級は、授業や学校行事など何事にも積極的に取り組み、ワークシートに自分の素直な意見を記入できたり、グループ活動では相手のことを尊重しながら自分の意見を伝えることができたりする生徒が多い。一方で、女子生徒の多くは、少人数でのグループでは発言することはできるが、クラス全体で発言する場面では周りの目を気にしてしまい、消極的になる生徒も見られる。

5月に行ったアンケートでは、「がんは身近か?」という質問に「そう思う」と答えた生徒が73%、

「がんは怖いか?」という質問に「そう思う」と答えた生徒は82%、「がんはもう怖くない」という質問には「そう思わない」「あまりそう思わない」という生徒が約80%いることから、がんは身近で怖い病気であると感じている生徒がほとんどであることがわかる。その反面、「治らない病気ではない」と考えている生徒が70%、「早く見つければ治る病気」という認識の生徒に至っては97%と高い割合を示している。

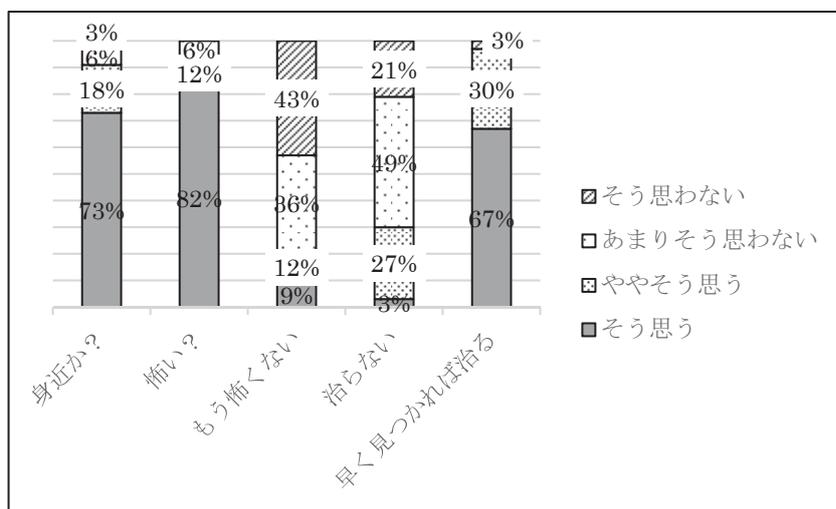


図2 がんについてのアンケート
【第2学年1組36名 令和元年5月実施】

③ 指導観

本単元では、がんという病気が、異常な細胞であるがん細胞が増殖する疾病であるという発生の仕組み、その要因には不適切な生活習慣を始め、様々なリスクが関わり合っている傾向を理解するために、ジグソー活動を取り入れた学習を行う。資料から情報を読み取り、その資料についての理解を深めたことをさらにグループで共有することで、がんには様々なリスクが関わり合っている事実気付くことができる。そしてそのリスクを減らすための方法をグループ活動から学級全体へと提案し

ていく。学習においては、がんで亡くなった生徒の親族への配慮も大切にしていきたい。

これらの学習を通して、自ら課題を思考し、リスクを減らすための判断力や、考えたことを他者へ伝える表現力を養うとともに、実生活でも生かすことができるがんの知識になると考える。

④ 単元の目標

- 健康な生活と疾病の予防について、基本的な事項を普段の生活と関連付けて理解することができる。 (知識・技能)
- 健康な生活と疾病の予防について、課題を発見し、その解決に向けて科学的に考え、判断し、表現することができる。 (思考・判断・表現)
- 健康な生活と疾病の予防に関心を持ち、学習活動に意欲的に取り組もうとする。 (主体的に学習に取り組む態度)

(3) 研究テーマにせまる手立て

I 一人一人の自立を促す学び

① 系統性や他教科との関連性、単元や時間のまとまりを重視した学びのデザイン

生徒は小学校において、「病気の起こり方」や「生活が関わっておこる病気」、「喫煙や飲酒」、「薬物乱用と健康」について学習してきている。生活習慣病の成り立ちなどの小学校で学習した内容と、理科（細胞分裂や呼吸器、循環器の仕組み）やグローバル市民科で学習した健康な生活とは何かを考える学習内容を本単元に生かし、小学校との系統性を大切にしたい指導や教科横断的な指導を行う。生徒は学んだ知識を今の学習や生活につなげることができる。また、中学校で学習した内容を高等学校での保健体育の学習に接続できるように課題意識をもてるような手立てを行っていく。そして、実生活でもさらに興味・関心をもち、既習事項を生かすことができるような掲示物の利用や授業構成を構想する。

② 思いや考えを深め合うコミュニケーション活動

本時においては、個人での活動からグループ活動、そしてクラスでの情報共有の活動と三段階で行う。個人活動として様々な種類の資料から情報を読み取り、グループ活動として違う種類の情報を持ち寄った生徒に自分がもっている情報を提供し、グループでがんのリスクを減らすための方策を考え、その方策をクラスで共有する。個人の活動からグループ活動に移行するにあたって、各個人がそれぞれの資料のエキスパートになり、その資料から読み取れる情報に責任をもったり、違う資料を持ち寄ったグループ活動において自分の資料の内容を相手に伝えたりすることで、多面的・多角的にがんという病気を捉えることができる。さらに、グループで考えた方策をクラスで共有することで、がんのリスクを減らすための方策をより様々な視点から考えることができる。また、授業後にはその情報を学年で共有することで、自分の考えたことを実生活に生かしていくために、保健の見方・考え方を働かせながら価値ある対話や考えを生み出すための機会となり、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成につながると考える。

II 社会への参画・貢献を促す学び ～人的・物的学習環境の整備～

本校保健体育科では体育分野、保健分野に関わらず附中スクールボランティア制度を活用し、大学教員、大学院生、卒業生や保護者など様々な方とともに授業づくりを行っている。今回は、養護教諭、大学教員、そして本単元の最後に行う予定である「がん教育講演会」では、講演者として医療関係の保護者、そして卒業生である学校医に携わっていただく。授業で学習したことをさらに専門的な見地から講演していただくことで、生徒は学習したことをさらに深く理解することができ、学校で学習したことを家庭で伝えたり、生徒自身の今後の生活につなげたりといった社会的な実践を意識した学習となると考える。

III 内省（自己探究・自己更新）を促す学び ～自分の「よさ」や「らしさ」を見つめるメタ学習～

本校保健体育科では、生徒の実態と身に付けさせたい力によって、様々な形式のワークシートを作成している。自分が知り得た情報をまとめたり、相手により分かりやすく伝えたりするために、絵や図、言葉を用いて枠組みなく自由に記入することで自己の学習を振り返りながら見つめ直し、次時の課題設定や自己や学習したことと社会とのつながりを考えることができると考える。

5 指導と指導計画（2時間扱い）

| 時間 | | 学習内容・活動 | 評価計画 | | | |
|----|---|---|------|-------|------|---|
| 次 | 時 | | 知・技 | 思・判・表 | 主・体的 | |
| | 1 | <p>○生活習慣の乱れと生活習慣病などのつながりを理解する。</p> <p>・生活習慣病とはどのようなものか、どのようにして起こるのかを理解する。</p> <p>・健康的な生活習慣を実践するためのマイプランを考える。</p> <p>・生活習慣病を予防するためには、早期発見、早期治療、健康診断が大切であることを理解する。</p> | ○ | | ○ | <p>㊦ 評価規準</p> <p>○指導上の留意点</p> <p>㊦ 生活習慣病に関する学習に主体的に取り組んでいる。</p> <p>【観察】</p> <p>㊦ 生活習慣病の成り立ちや、早期の発見・治療や健康診断が大切であることを理解している。</p> <p>【観察、ワークシート】</p> <p>㊧ 規準を満たすための手立て</p> <p>㊧ マイプランの作成が進まない生徒には、いくつか例をあげ、助言する。</p> |
| | 2 | <p>1 がんという病気について考える。</p> <p>様々な事象の確率とがんになる確率を考える。</p> <p>「がん」と「インフルエンザ」の違いは何だろう。</p> <p>2 本時の目標を確認する。</p> <p>がんを身近なものにとらえ、リスクを軽減するための方策を考えよう。</p> <p>3 がんの成り立ち（発生）について「がんモデル」を用いて理解する。</p> <p>正常な細胞 異常な細胞</p> <p>○○○○ ⇒ ○☆○</p> <p>4 個々にがんに関する様々な資料を配付しから、その資料から読み取れる情報を書き、まとめる。</p> <p>5 異なる資料を持ち寄った生徒とグループになり、各個人が読み取った情報を共有し合う。</p> <p>6 共有した情報をもとに、様々ながんについて、そのリスクを軽減する方策について協議し、提案書を作成する。</p> <p>7 各グループで考えた提案書の内容をクラスで共有する。</p> <p>8 本時のまとめと振り返り、講演会で質問してみたい内容を記入する。</p> | | ○ | ○ | <p>○ 生徒が興味のある事象の確率からがん発生の確率へとつなげたり、イメージマップを作成したりすることで、がんという病気は身近な病気であることを理解できるようにする。</p> <p>○ リスクという言葉の意味を生徒とともに考えながら、本時の学習内容を確認する。</p> <p>○ 普段は目にすることができない体の中の細胞の変化をわかりやすくするために、可視化できるモデルを使用する。</p> <p>㊧ 資料の読み取りが進まない生徒には、資料を見る視点をアドバイスし、読み取りやすくする。</p> <p>㊦ 積極的に資料の読み取りやグループでの活動に取り組んでいる。 【観察】</p> <p>㊦ 自分が考えたことや資料から読み取った情報を他者に伝え、提案書をまとめることができる。 【観察・ワークシート】</p> <p>○ 様々ながんのリスクを減らすための方策をグループそれぞれで提案することによって、多面的・多角的に考えられるようにする。</p> <p>㊧ 生徒同士で発表をつなげ、生徒自身の言葉で本時の振り返りができるように助言する。</p> |

<事後の指導>

医療従事者（臨床医・内科医）によるがん教育講演会を実施する。

7 授業の分析と考察

本実践についての分析と考察を試みる。

- (1) 「生活習慣病の予防（がんの予防）」の単元において、アンケート結果からジグソー活動が効果的であったかの分析を行う。

本単元では、植田等が作成したがんの授業に関するアンケートを学習前と学習終了から3か月後にとった。がんに関する基礎知識の部分においての質問事項の正答率を確認した。

| アンケート項目 | ジグソー活動クラス | | | 講義型クラス | | |
|----------------|-----------|-------|--------|--------|-------|--------|
| | 単元前 | 単元後 | 比較 | 単元前 | 単元後 | 比較 |
| ①がんは死因1位か? | 52.6% | 58.9% | +6.3% | 72.2% | 76.9% | +4.6% |
| ②がんは死因3位か? | 54.2% | 61.5% | +7.3% | 63.0% | 75.0% | +12.0% |
| ③2人に1人の発病率か? | 57.8% | 66.7% | +8.9% | 63.0% | 84.3% | +21.3% |
| ④特定の人が発病するか? | 79.7% | 80.7% | +1.0% | 86.1% | 88.9% | +2.8% |
| ⑤誰もが発病するか? | 89.1% | 83.9% | -5.2% | 93.5% | 88.0% | -5.6% |
| ⑥異常な細胞が増える病気か? | 57.3% | 74.0% | +16.7% | 55.6% | 85.2% | 29.6% |
| ⑦喫煙と関係があるか? | 74.5% | 76.6% | +2.1% | 78.7% | 87.0% | 8.3% |
| ⑧タバコは周りの人に危険か? | 84.9% | 81.8% | -3.1% | 88.9% | 85.2% | -3.7% |
| ⑨生活習慣が関係するか? | 72.9% | 77.1% | +4.2% | 85.2% | 85.2% | 0.0% |
| ⑩早期発見には検診が大切か? | 90.1% | 84.9% | -5.2% | 93.5% | 89.8% | -3.7% |

【表1 がんの授業に関するアンケート単元前・単元後 令和元年5月と11月実施 第2・3学年300名】

以上の結果から、単元前と単元後では単元後の方が基礎知識の正答率は上がっていることがわかる。ジグソー活動を行ったクラス、講義型のクラスのどちらも「⑤がんは誰もが発病する病気か」「⑧タバコは周りの人に危険な影響を与えるか」「⑩早期発見には検診が大切か」の項目においては、正答率が下がっている。この理由として考えられることは、⑤は授業後に行った外部講師を招いての講演会の際に、がんには遺伝的な要素も含まれるという事項が含まれていたこと、⑧は喫煙はがんとの関係があることは理解していたが、主流煙だけでなく副流煙にも発がん性の物質が入っていることは学習前であったためと考えられる。⑩は、表だった症状はなくともがん検診が早期発見のためには有効であることがわかったが、がん検診を行っているがんの種類は少ないという情報から、正答率が下がったものと考えられる。ジグソー活動を行ったクラスと講義型の授業を行ったクラスの単元前と単元後と比較した数値だけをみると、講義型の授業を行ったクラスの方の数値が大きく出ているが、これは知識だけを教えるには講義型が適しているとも言える。しかし、数値こそは低いが、ジグソー活動を行ったクラスにおいても同様に単元前と単元後の比較ではプラスの数値が出ているため、ジグソー活動でも同様の知識を身に付けることは可能であることを示している。比較の数値を上げるためには、ジグソー活動の内容を吟味し、1時間内の活動を絞る必要があると感じた。また、このアンケートだけではジグソー活動が授業として有効であったかどうかは不明確のため、アンケート項目の再考が必要である。

- (2) 学習に使用したワークシートから、実生活につなげている（つなげようとする）記述を抽出し、「見方・考え方」を働かせている内容を明らかにする。

本単元の授業では、各グループに5つの都道府県と年齢、性別を限定したカルテカード（図3）を配付し、その対象者に向けて、各自の資料からわかることをもちより、アドバイスをするというジグソー活動を行った。生徒からは以下のような発表があった。

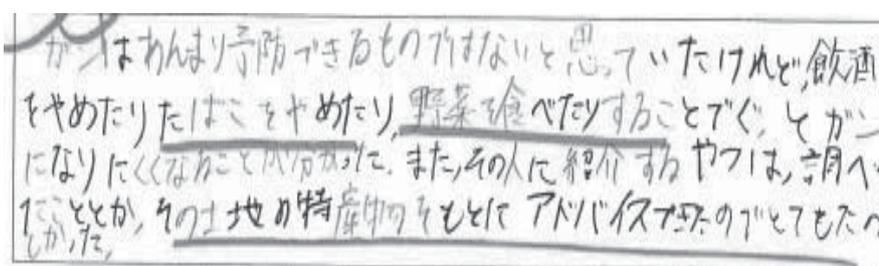
例) 私の班は広島県30代を対象にアドバイスします。
 広島県は私のもっているがん検診受診率の資料から、がん検診が国の推奨している値の50%に達していないのがわかります。バランスのとれた食事、適度な運動は発がんを抑える働きをするのでもちろん必要ですが、社会の教科書の地図から、広島県は牡蠣が名産であることがわかります。別の資料ですが、牡蠣にはがんのリスクを抑える作用があるので、旦那さんは牡蠣をたくさん食べ、奥さんに真珠をプレゼントすることをお勧めします。地元の活性化、がんのリスクは抑えられるし、

奥さんは喜ぶので一石三鳥です。

保健分野における「見方・考え方」とは、「個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること」である。この活動を取り入れたことで資料を読み込む際に、保健体育の教科書だけでなく、社会科の教科書や家庭科の教科書を手にする生徒の姿が見られた。上記の下線部のように他の教科から学習した知識を、本單元にも生かしていることがわかる。教科横断的な学習ができていないことだけでなく、これこそ生きて働く知識であり、実生活につなげている（つなげようとする）ことだといえる。また、ジグソー活動は、社会科や数学科で学習した「資料を読みとる力」が必要なだけでなく、同じグループの他の資料を持っている生徒と情報交換をする際には「伝える力」も必要となるため、今回、自分の資料をもとにグループやクラスでクロストークを行った。クロストークは、知り得た情報を的確にグループ（チーム）やクラスに伝え合い、情報を共有することを目的に実技分野でも取り入れている。こういった活動は、生徒相互の学び合いにつながると考えており、「伝える力」を構築していくためにもジグソー活動とクロストークは有効であったといえる。



【図3 カルテカード】



【図4 上記生徒の学習カード】

- (3) デイリーライフ（生活の記録）や学習終了から3か月後の感想から、本授業が実生活にどのような影響を与えているかを調査する。

学習終了から3か月後に類似したアンケート調査を行った。調査項目と結果は以下に示す。

| アンケート項目 | 数値 | |
|---------------------------|-------|-------|
| | 事前 | 事後 |
| ・ 家族に授業のことを話したか？ | 57.0% | 47.7% |
| ・ 両親や祖父母にがん検診を受けているか尋ねたか？ | 29.2% | 20.3% |
| ・ がん検診を受けていない家族には勧めたか？ | | 21.8% |
| ・ もっと知りたいことを調べたか？ | | 28.6% |
| ・ 友達とがんについて話したか？ | | 24.8% |

【表2 学習3か月後のがんに関するアンケートの結果 令和元年5月と11月 第2・3学年300名】

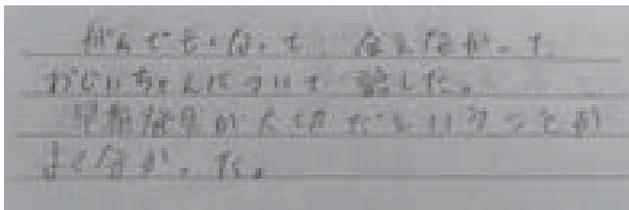
一見、「家族に授業のことを話したか？」「両親や祖父母にがん検診を受けているか尋ねたか？」についての項目の数値が、事前と事後を比較して下がっているように見えるが、この項目はすべてがんの授業を受けた後のことを聞いている項目であるため、事前と事後の数値は比較対象ではない。学習前も学習後も家族と授業のことを話した生徒は約半分のため、家族でがんについて会話をするよききっかけとなったと考えられる。また約2～3割の生徒が学習後に家族へがん検診を勧めたり、調べてみたいと思ったことを調べてみたり、友達とがんについて話してみたりしたこともわかる。

また、図5～図8のように学習3か月後までに取り組んだ内容も様々あった。

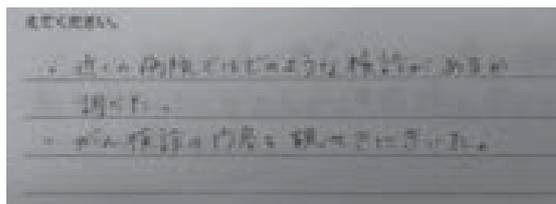
例) ・ がんで亡くなって会えなかったおじいちゃんについて話した。早期発見が大切だということがよく分かった。

- ・近くの病院ではどのような検診があるか調べた。
- ・がん検診の内容を親戚に聞いた。
- ・祖父ががんで発病しているので話を聞いた。
- ・がんについてのテレビ特集を見た。インターネットや本でさらに調べた。今は、がん細胞を正常な細胞と取り換えてがんを治すという治療法もあるが、道徳でもやったようにそれが正しいかどうかはわからない。

今までは、「がんは特別な病気」として、できれば触れず内密にというような風潮もあったが、この学習を通して、「がん」という病気をより身近に感じ、家族で考えたり話をしたりして学習したことをより深めるよい機会となったと感じた。また、中には道徳の学習とリンクさせ、生命の尊重や尊厳について考える生徒もいたのは、今までの保健体育科の研究の中でもなかったことであり、大きな躍進といえる。



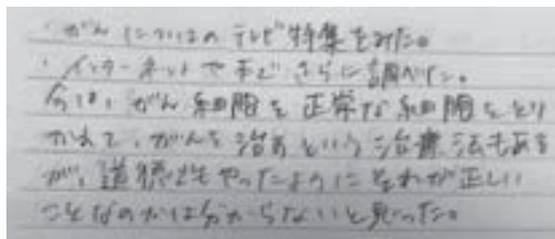
【図5 学習3か月後までの取組①】



【図6 学習3か月後までの取組②】



【図7 学習3か月後までの取組③】



【図8 学習3か月後までの取組④】

8 研究の成果と今後の課題

今回の研究で、様々な教科で学習をした知識を活用しながらジグソー活動を行うことができ、生涯を通して健康の保持増進を目指す実践力を育成することができた。また、学習したことを家族と話し合ったり、自分で調べたりする機会を各自で設けることができた生徒もおり、授業後数か月経った後も印象に深く残っていることがわかる。今回行った単元では、本来2～3時間扱いで行うジグソー学習のジグソー活動のみを取り上げ、保健分野の限られた時数の中でも「見方・考え方」を働かせて実生活に生かせる知識を身に付けることができるように提案した。活動内容を絞ったとはいえ、情報収集やグループでのシェア、課題解決、クラスでの情報シェアとなるとそれだけでかなり盛りだくさんになってしまい、時間がもっと必要であると感じた。今後は、1時間単位の授業に適合するジグソー活動の含量や時間配分、また、保健分野の見方・考え方をより働かせて取り組めるような授業改善のための手法を研究・実践し、提案していきたい。

【参考文献】

- ・文部科学省「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」 中央教育審議会初等中等教育文化会教育課程部会 平成28年8月
- ・文部科学省「中学校学習指導要領解説保健体育編」平成29年7月
- ・梅澤秋久「体育における『学び合い』の理論と実践」平成27年7月大修館書店
- ・田中博之「アクティブ・ラーニング『深い学び』実践の手引き」教育開発研究所 平成29年8月
- ・澤井陽介「授業の見方『主体的・対話的で深い学び』の授業改善」東洋館出版社 平成29年10月
- ・植田誠治・物部博文・杉崎弘周「学校におけるがん教育の考え方・進め方」大修館書店
平成30年3月